

# A Psychological Study on Unfolding Intention in Utterance (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23377">http://hdl.handle.net/2297/23377</a>

# 発話と意図の展開に関する心理学的研究(I)

山岡 哲雄・川平美根子\*

## A Psychological Study on Unfolding Intention in Utterance (I)

Tetuo YAMAOKA & Mineko KAWAHIRA

### 1. はじめに

人の発話は、送り手による受け手へのメッセージの伝達を目的としたものであるが、このメッセージが発話により文として成立する過程が、送り手の持つ伝達意図の意識化の過程にもなっているものと考えられる。メッセージの送り手は、予め十分にその意図するところを頭の中で構成して、発話すべき文の構成を確認してから、おもむろに発話を開始することもあるが、そのように特別に構えて、準備を整えてから発話を開始するようなケースは、むしろ特殊なケースであって、自然な発話過程ではない。このような発話は、フォーマルな式典の挨拶であるとか、込み入った内容を間違いなく伝達しなくてはならないような場合に、用意してあった原稿を朗読する場合がこれにあたる。前者は、結婚式の祝言の挨拶などの場合に見られるものであって、発話者が普段この種の改まった挨拶に慣れていないために、前以って作文し練り上げた文章を暗記し、これを暗唱するのである。しかしこの不自然な発話は、澁みなくなされることもあるが、大抵ぎごちなく、一旦どこかの部分を忘れていたり、発話の順序を取り違えたりすると、つかえてしまい、後はしどろもどろのみっともない挨拶になり果てる。後者の場合には、原稿の棒読みであるから、大過なく読み上げられるが、それは誰が見てもその人の「発話」とは異質のものであると感じられるし、原

稿にミスプリントがあったり、脱落があったり、読み間違えたりすると、やはりしどろもどろになってしまうことに変わりはない。このような一旦作られた原稿の暗唱または棒読みは、ここでいう発話とは、異質のものである。この場合、発話に相当するものは、原稿が作られる段階であって、このとき実際に音声化されて発話されることは稀であるが、発話意図が文として構成される過程に注目すると、「音声化」されない発話とみなして差支えないものと考えられる。従って本論では、発話をこの様に音声を伴わないものをも含めて、意図が文の形をなして展開してくる過程として捉らえることにしたい。

ところで意図が発話として展開してくる過程がどのようなものであるかについて我々の日常経験を内省してみると、この過程は殆ど自動的無意識的になされており、そのメカニズムを意識的に追跡することは殆ど不可能であることが分かる。理解し得ることは、先ず初めに無意識の中から了解事項としての或る主題、つまりここでいう意図が何等かの形で記号化されたピンポイントとして出現し、次にそこから記号が繰り出されて来て、最終的に線形の時系列記号の配列する文が成立する、ということのみである。このときの過程について考えられることは、記号の繰出しによって、意図が内包する意味乃至は情報がほぼ出尽くしたときに、記号の繰出しも臨界に達するであろうということである。そのことによって繰り出された記号列が終止し、

\*本学大学院生

一つの纏まりができる。これが我々が文と呼んでいるものに相当する。もちろんこれは無秩序な単なる記号の羅列ではなく、文法的秩序が見られる。しかしここでは文を構成するいわゆる規範文法規則の吟味からではなく、発話における語の繰り出しに関する普遍的規則の仮定とその考察から始めることにしたい。

最終的には、規範文法の規則を満たした語の単位配列を文と呼ぶとしても、刻々の発話そのものは各時点における語の繰り出しによって成り立っている。我々は発話において、その刻々の語の繰り出しに際して、前の語の意味や品詞やその語形が何であったから次の語はどのような意味や品詞やその語形の語を繰り出すべきだと一々意識的に選択することは先ずない。このような操作を必要とするのは、母国語以外の言語で語学の答案を作成するとか、手紙や文章を書くときだけであろう。普通習熟した言語の発話の際には、語の繰り出しは、前述したように無意識的に自動的になされる。この発話の自動化のために、事前にその言語への習熟が必要であることはいうまでもないが、様々な新しい言い回しの発話が、殆ど無意識的に自動化して行われることについては、単に規範文法の習熟ということでは説明がつかない。文法的説明以前の発話という現象に関する言語心理学的、及び人間の生理心理学的レベルにおける発話の基本法則のようなものを仮定する所以なくてはこの問題は解決しないであろう。

そこでこの問題を探るために発話の性質を吟味すると、発話における語の繰り出し順位と、繰り出された語の意味関係に、或る種の力関係が見出だされる。その具体的問題は後述することにして、ここでは導き出された関係のみを、本論の基本仮説として提出しておくことにしよう。

発話における最初の語の繰り出しが、全体としての意図から直接繰り出されることには、誰も異存はないであろう。では以後次々に繰り出されてくる語はどうであろう。ここで筆者らは、このとき繰り出される語相互の関係は次のような規則に従っているものと仮定した。

発話文において、繰り出されてくる隣接した

先行語と後続語との相互の関係には、

①仮定1：先行語は後続語の意味を内包する

②仮定2：後続語は先行語の意味を限定する

このような力関係が成立する。そしてこの2つの性質について、

③仮定3：どのような規範文法規則に従う言語においても、この仮説1と2の基本的関係は保たれており、それぞれの規範文法規則は、この基本的関係を、異なった様式で実現するための下位規則に過ぎない。極端な場合には、規範文法では品詞の配列順位が正反対になるような異種の言語があったとしても、その配列はそれぞれの言語において上の仮説1と2に示した関係によって実現した様式であると仮定するのである。

(以上の仮定はこれは山岡が1980年の論文a,bで提出した仮説を簡潔に整理したものである)以下において、上の仮説に至る筆者らの論拠を述べることにしたい。

## 2. 発話のモデルについて

発話が行われるのは、発話されるべき話題、つまり意図があって、これが発話者以外の、第三者に伝達されるときである。もしその伝達の必要性がなく、これが発話者の内にのみ留まるものであれば、それは本人の了解事項として、ただ意図のレベルに終わるのであり、発話には至らない。つまり発話は意図が第三者へ伝達される必要性によってなされるものであり、このとき、意図がある個体から他の個体へ伝達されるためには、この意図が両個体に共通した相互翻訳規則を持つ符号に置き換えられねばならない。この置き換えられた符号系列が、一般に伝達文またはメッセージと呼ばれているものである。

この関係は、Osgood,C.E.とSebeok,T.A.(1954)によって図1のように簡潔に図式化されている。

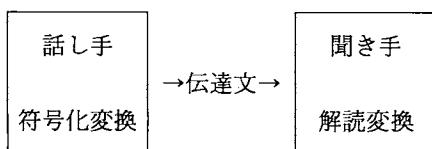


図1. OsgoodとSebeokによる発話モデル。

つまり上の図は、話し手（発話者）は頭の中にある話題を伝達文として出力するのであるが、この過程は、脳に生得的に備わっている神経伝達過程を用いていながら、意図された話題の内容をある集団によって構成された様式である変換規則に基づいて分析し、符号に置き換えて、音声出力する過程と、こうして形成され出力された伝達文を、聞き手（受け手）が同じ変換規則に基づいて、符号から神経過程に置き戻し、更にこれを初めの意図に収束する過程を図式化したものである。もちろんこのとき必ずしも、発話者が変換規則を正当に用いるとは限らないし、受け手が発話者の用いた変換規則をそのまま遡っていくとは限らない。それぞれの人の気分や行動様式により、符号化と解読に個性の入る余地がある。そのため意思の疎通が不十分となったり誤解を引き起こしたりするのであろう。従って Carroll,B.J. は、Osgoodらのモデルを、「話し手の意図的行動」→「話し手の符号化変換行動」→「伝達文」→「聞き手の解読変換行動」→「聞き手の意図的行動」というように幾分修正して表現している。

Thom,R. (1973) も、発話者の出力過程を意図の符号化過程、受け手の入力過程を解読過程と説明しているが、この両過程はそれぞれ分析過程と統合過程であると述べている。つまり話し手が初めに表出しようと意図しているものは「内的統一性をもったメッセージの意味」とでもいすべきものであって、いわばまだ構造をもたない未分化な意味の塊のようなものを想定しており、これが分析されながらメッセージとして繰り出されてくるのだというのである。彼の比喩的説明によれば、それは化学者がレトルトの中に化学物質を入れて加熱する過程に譬えられるという。つまりレトルトの中の化学物質は、重油のように将来分析されて出てくる総ての成

分が渾然一体となって混ざっており、これが適切に加熱されることにより、揮発性の高いものから順に析出されてくる。発話過程も丁度これと似た性質をもっており、発話の意図は初めは未分化で構造をもたないが、この中から不安定な成分から分離されて語として表出されるのであるという。彼はこの語順を、文の品詞の出現順位で説明しようとした。欧米語の場合、その語順は伝統文法で、①名詞、②形容詞、③動詞、④助動詞、⑤前置詞、⑥その他の補助詞の順に重くなるのではないかと述べている。つまりこの逆の順位で表出されるというのである。その判定基準として彼は2つの基準を挙げているが、1つは名詞は実体を表し、その実体は様々な属性を伴うから、実体を表す名詞は重く、それを形容する形容詞は軽く、実体を説明する動詞はもっと軽いと言うように分けていく。もう1つの基準は動詞は形容詞化することも、名詞化することもできるので最も軽く、形容詞は動詞化できないが名詞化できるので軽く、名詞は形容詞化も動詞化もできないので最も重い、と言うように説明する。この説明は欧米語についてはある程度成り立つものと思われるが、日本語の語順については、妥当しない面が多いようである。このことについては、彼も気づいているようであり、日本語やアメリカインディアン語の一部では、文中の語順が欧米語とは極めて異なっており、欧米語が主語+動詞+目的語 (S + V + O) であるのに対して、日本語などでは主語+目的語+動詞 (S + O + V) となることについて言及し、これは話し手とメッセージと聞き手との関係における言語体系が、欧米語では話し手中心で、話し手の都合の良いように発話されるのに対して、日本語では話し手が聞き手の立場を重視する言語体系であるための違いであろうと考えている。もしそうであれば、Thomのモデルでは、文中の語順を品詞で吟味すると、(比喩的ではあるが) 相対的に「軽い」品詞から順に分析されて表出されてくるというが、これは欧米語にのみ特異的に見られる現象であって、必ずしも人の言語一般に共通した性質とは言い得ないようである。彼の説明か

ら推測すると、日本語ではむしろ相対的に彼の言う重い品詞から表出される可能性もあることになるであろう。従って文中の語順の決定因はThomの見解とは別に求める必要がある。この問題については、更に詳しく検討する必要があるが、子供の言語発生過程における品詞出現順位についての資料も、この問題を考える上でヒントとなり得るものである。この出現順位は、Sternらによれば、欧米語の場合、①感嘆詞、②名詞、③動詞、④形容詞、⑤副詞の順であったという。日本語の場合には、①名詞、②代名詞、③感嘆詞、④動詞、⑤形容動詞、⑥形容詞、副詞、助詞の順であり（山岡、1975）、Thomの基準によれば、先に現れた語の方が重いということになる。しかし子供の言語発生過程における語の分類として、規範文法の品詞を当てはめるのは、妥当とはいえない。この段階の発話において、規範文法があてはまらないことはすでに周知の事実である。同じ様に、成人の発話においても、刻々発話を進めている段階で表出されていく語に、規範文法の品詞の役割を当てがうことには問題があるかもしれない。

つまり不安定で、軽く、揮発性のある成分から先に分析されて表出されていくというように理解するのではなく、初めに表出される語は未分化な状態を示すものであり、次の段階で、その中から幾分分析された成分が語として表出され、これが順次継続していく一連の分析過程として理解すべきものではないかと思われる。そして一連の語の連鎖において表出される意味の構造化が成されるのであろう。敢えてThomの品詞の重さで述べるならば、この関係は初めに表出される語ほど重いのである。このことは子供の言語発生過程についても当てはまる。

### 3. 発話の発生過程

子供の言語の発生過程は、その個体の発育過程に伴う性質のものであり、誕生以降のかなり長期的な時間軸に沿って展開してくる。その最初の発話は、一般に生後12か月頃に発せられるといわれるが、その時期については個体差や環境差があり、また発育加速現象がみられるので

最近はもっと早い月齢で発話が開始されているようであり、一概にどの月齢からとは断言できない。しかしこの最初の発話の意味的、統語的性質については、ほぼ見解の一致が得られているようである。つまり幼児がその成育過程で最初に発する発話は所謂成人の文の構造を備えておらず、単一の語の形で表出される。例えば「マンマ」のような1語が発話されるのみであり、何ら文としての統語的構造をもたない。しかしこの段階では、この1語が成人の1文に相当する意味を備えているものと考えられている。つまり発話者にとっては、この時期、1語しか発することはできないが、何か完全な文の内容を心に描くことができるのであり、従ってこの1語は成人が発する1文に相当する意味内容乃至発話の意図を含んでおり、事実上文と同値であるという。のことからこの時期の1語発話は、「1語発話文」と名づけられているのである（McNeill,D.1970）。この1語発話文における単一の語は、別の見方をすれば、発話者の意図というアリアリティが語という記号に置き換えられたのである。この1語発話文の段階が暫く続くと、次に2語の発話で発話者の意図が表出される時期が来るが、これも上述と同じ理由によって「2語発話文」と名づけられている。この2語発話文の段階で生ずる特徴は、「マンマ イル」などのように1つの意図が2つの語に分割されて記号に置き換えられていることであり、大まかに見て、文は主部と述部に分かれ構造を持ったものとなる。ところでこの2語発話文は、それに先立つ1語発話文に引き続いて生じたものであって、この2語発話文の生成には、これまで2通りの可能性が議論されてきた。1つは先行して出現した1語発話文「マンマ」に次の2語発話文で「イル」という語の発話が可能になり、併せて2語発話文である「マンマ イル」が実現したのであるという考え方である。この見解は、基本的には心理学史上では、要素観に基づく連合主義心理学とこれを引き継ぐ行動主義心理学で採用されたものに近い。もう1つの見解は、先行する1語発話文の「マンマ」に含まれていた「イル」という意味が、「マン

マ」から分析されて、語として独立して表出されたのだと考えるものである。この見解はGestalt心理学によって主張された全体からの部分の分節化という考え方についえよう。

前者の見解では、各段階で表出された語を、そのまま規範文法における品詞として取り扱うには都合が良いが、1語で文としての機能を持ち、発話者の意図乃至発話の意味内容を総て含んでいるという1語発話文の定義と相入れないものとなる。これに対して後者の見解では、先行して表出されるようになった1語発話文における語を、規範文法の語やその品詞に分類することはできないが、1語発話文が発話者の意図乃至発話の意味内容を総て含んでいるという前述した定義と矛盾しない。発話者の意図が、一旦、1語の記号に置き換えられた後、次にこれが更に2つに分析され、2語つまり2つの記号に分割（或いは分節）され、置き換えられて表出されたものと考えることができる。この場合表出される語は、基本的には、先ず1語発話文において、既に発話されていた「マンマ」という語が表出され、次いでこの「マンマ」に含まれていた「イル」の成分が語として析出されて表出されると考えるべきであろう。このように考えると、1語発話文の段階で表出された「マンマ」という語と2語発話文で表出された「マンマ イル」における「マンマ」という語とは、その表出された意味内容も、語としての階層レベルも品詞としての格付けも総て異なるものであることになる。もちろん2語発話文を構成する2つの語の内の1語が、必ずこれに先行する1語発話文の語と一致するとは限らない。しかし一般的には同一の意図が1語発話文から2語発話文へと進化する場合には、先行する1語発話文の語が核となる傾向が強い。この傾向は、Braine,M.S.D. (1963) が文の生成に関して言及している軸語の概念を援用すると、説明が容易となる。Braineは、幼児の2語発話文を構成する2語の内の1語が他方よりも出現頻度が高く統語構成上の演算子として働く傾向があり、もう一方の語は様々な意味を持つ語彙の中から選び出されてくる傾向が見られると述べている。

この傾向は、引き続く3語発話文、4語語発話文…多語発話文においても見られるものである。

従ってこれら幼児期に見られる文の段階的発生過程においては、初めに発話の意図は全体として未分化な塊を成し、これが1語発話文として記号に置き換えられて表出されるが、次の段階には一旦この1語発話文として記号されたものが更に分析される。このとき原則として1語発話文で記号化された語と、そこから析出された意味の部分が別の記号として語をなして表出される。以下この関係が連鎖的に生じて複雑な文を生成していくのだと考えられる。その過程を、初めの意図の1記号化（1語発話文）から成人の複雑な文への発達過程を漸次分節化した記号への置き換え過程として展開させていくと、あたかも Chomsky,N. (1963)による生成文法における樹系図に類似したものが形成されていくことが分かる。Lenneberg,E.H. (1967) は成人の文の生成過程を論じて、文に意味を付与するのは、句構造標識が心理的に実在すると考えざるを得ないと述べているが、幼児の発話文が成人の発話文に発展していく過程もまさにこの同じ実在性を示しているといえるのである。この関係を図示すると、図2の通りとなる。この図は、幼児が発話を始めてから成人の発話文へ至る過程を示すものであり、初めの意図を代表する語が、そのステップを進めるに連れて、限定されたものとなり、初めに含まれていた意味が、別の語に置き換えられていく過程が示される。この図は、その発達過程を上から辿ると、生成文法の樹系図に類似した分岐図をなしていることに注目されたい。この類似性は、恐らく幼児の言語発生の段階的発達過程が、類似した有限の変形規則によってなされていることを推測させるものである。

まんま

まんま 食べたい

もっと まんま 食べたい

わたし もっと まんま 食べたい

わたしは もっと たくさん ごはんを 食べたい

図2. 子供の言語の発達段階.

この図2に示されたことから、幼児の言語の発達段階が進展するに連れて、ある一つの意図が、一層多くの語によって表出されるようになるので、初期の段階に発せられる語ほど、そこに含まれた意味内容は（Thomの用語に従えば）「重く」、同じ語が次の段階で表出されたときには、その語の意味内容は「軽く」なっていく。つまり段階が進むに連れて、初めに表出されたその同じ語に含まれていた「意味」は、後から表出されるようになった語に引き継がれていき、空洞化していくと考えられるであろう。この関係は、発達段階という数か月から数年間に渡って繰り広げられるものである。そして最終的には、意図から、成人の構文的にはほぼ完成した文が表出される段階に到達するのである。しかし我々の発話における表出体験からは、意図がこのような規則によって分析されたという自覚はないし、現実に表出される語の順位は、この分析過程の初期段階から後期段階へ下降する性質のものではない。樹系図の最下段にある文の左から右への配列である。つまり各段階で発話される「文」を構成する語の配列は、前述する意味の分析過程を体現したものであるはずであるが、現実に発話される段階では、その表出順位は図2における関係を反映していない。しかしこの文における最終的配列も、やはり前述した意味の分析乃至繰出し過程によって成り立つものである。この問題は、図2の分析過程において2次元面上で表現されたものを、最終的に「文」としての1次元的時間軸上に表現するための変換過程を仮定しなくては説明できないであろう。

#### 4. 文の表出過程

そこで次に「文」生成の性質とその条件について検討することにしたい。

発話される文は、全体として1つの意図を表すが、発話の成立過程としてこれを観察すると、周知の通り、文頭の語から順に表出されて、文末の語で終了する一連の語の統語的時系列である。この関係は、第1節において「記号の繰出しによって、意図が内包する意味乃至は情報が

ほぼ出尽くしたときに、記号の繰出しも臨界に達するであろうということである。そのことによって繰り出された記号列が終止し、「一つの纏まりができる」というように説明した。そしてこの過程は、子どもの言語発達過程において見られた意図の分節過程、つまり各発達段階の発話にみられた意図の分節過程が、線形の時系列過程として展開したものと考えられるので、子供の言語の発達段階において見られた、月齢の経過による分節過程が、1つの発話の分節過程として何等かの変換処理がなされて再現されると考えるべきであろう。従って図2に示した樹系図では、月齢による発話の分節化を上から下に向けて、時間軸を立てた形式で表現されていたが、この時間軸を90度回転して、文の表出過程を線形に示す時の左から右方向へ変換する必要がある。

そこでこの新しい時間軸上で、成人の発話を考える場合、文頭に当たる初頭発話語は、その文が完結した暁にはこの文の構文上の1語として扱われるものであるが、その語が発話された時点では、取り敢えず、幼児の言語発話の1語発話文と同じ性質を持っているものと考えることにしたい。つまりその時点ではその語の品詞と語形の如何に関わりなく発話の意図を全体として代表する働きをしているものと考える。次に続く語が表出されると、この新しく表出された語は、その発話の時点においては2語発話文において繰り出されてきた語と同じ働きを果たしているものと考えることにしよう。この新しく繰り出された語は最初に表出された初頭語が意図を全体として表現していたために、意味が限定されておらず、漠然として曖昧であったのに対して、これを限定した意味にする働きを持つものと考えられる。この第2の語が表出されることによって、初頭語である第1の発話語の役割が変質する。つまり後続語が表出されたことによって先行語と後続語という新しい関係が生じ、先行語の性質が限定され変質するのである。この関係が順次第3発話語、第4発話語…に引き継がれ、その度毎に、表出された語相互の関係が一層複雑化し、体制化され、先行した

語の性質と役割が変質していくというように考えることにしよう。言い換えると我々の発話は、殆ど無意識に、且つ自動的になされるが、これは初めに発話の意図を表出し、次いでこれが具体的にどの様なものであるのかを、継続的に分析してみせる過程であるということである。

この過程を図示すると、図3のように表現することができるだろう。文の発話において、最初に表出された語は、表出時には、発話の意図の総ての意味 $M_s$ をその語の中に持っている。図中の語 $w_1$  ( $M_s$ ) はこの段階を示すものである。次に表出される語 $w_2$ の意味 ( $M_2$ ) は初めに表出された語 $w_1$ の中に含まれてはいるが顕現していない。語 $w_2$ の表出はこの語 $w_1$ に内在した意味 ( $M_2$ ) の顕現化である。そして語 $w_2$ が表出されることによって、その時点で語 $w_1$ の意味 ( $M_s$ ) は $M_1 = M_s - M_2$ となる。丁度箱の中から次々と中の箱を取り出すような具合に語が繰り出されて行き、そのことによって先行して繰り出された語の意味が限定され、文中における語の機能的役割が決定されていき、この意味の限定が臨界に達したときに語の繰り出しが終り、文が完結することを図示したものである。

幾分独断的ではあるが、このように考えない限り、人が発話の意図を、複雑な文の形に殆ど無意識に近い形で表出することができる理由を説明できない。筆者らが初めに仮定の形で提出した3つの原則は、心理学的レベルにおける文生成の基本文法に近いものであって、恐らく発話された文から帰納されるものではなく、文はこの仮定された原則に基づいてその表出と生成が説明されるべき性質のものである。

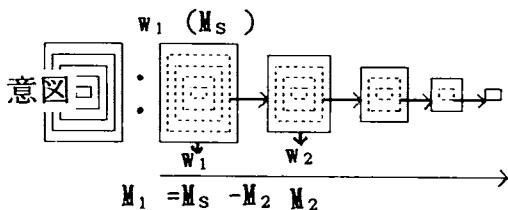


図3. 文発話における語と意味の繰出し。

## 文献

- Braine,M.D.S. The ontogeny of English phrase structure : the first phase, *Language*, 39, 1-13, 1963.
- Chomsky,N. 勇康雄訳 文法の構造. 東京：研究社, 1963.
- Clark,H.H. and Clark,E.V. 堀口俊一訳 言語と心理——聞くこと・話すこと——. 東京：桐原書店, 1981.
- Hörmann,H. 小熊均訳 詳説言語の心理学. 東京：誠信書房, 1975.
- Lenneberg,E.H. 佐藤方哉、神尾昭雄訳、言語の生物学的基礎. 東京：大修館書店, 1974.
- McNeill,D. 佐藤方哉, 松島啓子, 神尾昭雄訳 ことばの獲得 発達言語学入門. 東京：大修館書店, 1972.
- Thom,R. 弥永康夫訳 自然言語の類型. 自然, 東京：中央公論社, 7, 33-46, 1973.
- 山岡哲雄 幼児の言語発達に関する心理学的研究. 駒沢大学文学部研究紀要, 33, 58-85, 1975.
- 山岡哲雄 意識化過程と思考過程に関する研究 (1)…語順による印象形成…. 駒沢心理学論集, 2,(1), 1-7. 1980a.
- 山岡哲雄 意識化過程と思考過程に関する研究 (2)…印象形成の構造に関する研究…. 駒沢心理学論集, 2,(3), 1-6. 1980b.
- 山岡哲雄 言語の発達とその機能. 心理学の広場 Part 1, 東京：芦書房, 1-65, 1980.
- 山岡哲雄 言語の発話と学習. 金沢大学教育学部 学習心理学 平成7年度講義録, 1994.

